

エペソ書 5 章 1-20 節 「神に倣う者」

1A 愛のうちに歩みなさい 1-7

1B 捧げる愛 1-2

2B 不品行 3-7

2A 光の子供らしく歩みなさい 8-14

1B 実を結ぶ者 8-12

2B 光に引き出される私たち 13-14

3A 賢い人のように歩みなさい 15-20

1B 機会を生かす 15-17

2B 感謝と賛美 18-20

本文

私たちは今朝、通常の箴言の通読の学びから離れて、エペソ人への手紙を読んでいってみたいと思います。午前礼拝だけを守る時に、私はエペソ書を説教本文にしてお話していくことが多かったのですが、今回は 4 章まで読んでいました。それで 5 章の前半部分を取り上げてみたいと思っ
ていますが、改めて 4 章以降に書かれていることを眺めてみたいと思います。なぜエペソ書を取り
扱うかと言いますと、教会を知ることができるからです。教会とは何か、教会がどのような歩みを
すべきなのか、教会として集まっている私たちが、その基礎を確認していきたいと思っています。

エペソ書 4 章 1 節をまず、見てください。「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召
されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」とあります。「歩みなさい」という勧めをパ
ウロは行っていますが、これが 4 章と 5 章に続けて書いており、キリスト者としての歩みの基本を
彼は教えています。けれども、そのつながりが大切です、「召されたあなたがたは、その召しにふさ
わしく」とあるのです。キリストにある者たちは、第一に、召された者である、呼ばれたものである、
ということです。使徒パウロは、このことを教会の人たちに知ってもらいたいと神に祈っています。1
章 18 節です、「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与え
られる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか」とありま
す。1 章から 3 章までに、神の召しによって与えられた望みがいかに優れたものであり、その受け
継ぐものがいかに栄光に富んだものであるかを、一つ一つ説明していています。その召しがあ
るからこそ、その召しにふさわしく歩みなさい、とパウロは言っています。

私たちは、神に呼ばれた存在、召された者たちであることを知ることは大切です。イエス様は弟
子たちに、こう言われました。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わた
しがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そ
のあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは

何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」神が自分を召しておられることを知れば、神が信仰生活の中心になります。大事なのは自分ではなく、神ご自身です。そしてもう一つ、神に召されていることを知ることは、その使命を果たすのに必要なものは、すべて神が備えてくださることが分かります。聖霊による賜物、力、知恵が与えられます。

そして 4 章の初めにおいて、召しにふさわしく歩むことにおいてパウロが語っていることは、とても興味深いです。「2-3 節 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」とありますが、一致することについて、私たちが主にあって一つになっていることに焦点を合わせていることをパウロは教えています。そして、一つにされていながら、キリストが聖霊によって賜物を分け与えてくださって、その賜物を用いることによって、それぞれの部分が愛によって組み合わせられて、建て上げられてくという流れになっています。イエス様が、弟子たちを召し、また彼らによってこれからご自身を信じていく者たちのことを考えて父なる神に祈られたのは、一致でした。(ヨハネ 17:21-23)

ですからイエス様を信じて、ではいかに歩んでいけばよいかを考える時に、初めにすることは、「自分が教会の一部とされている」ということなのです。教会があって、それで初めてキリスト者の歩みがあります。ですから教会の中で、自分が一つとなっているのかどうか、それとも不協和音を起こしていないか、キリストの体の一部にされたという神の召しに、いかに忠実であるか？その平和をいかに御霊によって保っているのかどうか？こうしたことを知らなければ、その後のキリスト者としての歩みはまるで勘違いのものになってしまいます。

そしてパウロは、4 章 17 節からキリスト者が受けるべき警告を含めて、「こうやっては歩んでならない」というものを教えます。「そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」主にあって言明、厳かに勧めますという前置きをしています。それは、異邦人のように虚しく歩むということは、その結末は滅びと死だからです。キリストが来られたのは、その死と滅びから免れるためであり、私たちが救われた者に相応しく歩むことは当然のことです。

異邦人の歩みというのは、どういうものを説明しています。「18-19 節 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」天地を造られた神を心に抱かないので、道徳的に無感覚となってしまっている、好色や不潔な行いを貪るようになっていく、ということでもあります。

そこで、パウロはキリスト者生活の、一つの原則を教えています。それは、「脱ぎ捨てる」ことと「身に付ける」ことです。「22-24 節 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において

新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」私がイエス様を信じて間もない時に、宣教師の牧師から、この原則を分かり易く説明してもらいました。「ズボンをはく時に、どちらの足から入れる？」あまりにも無意識に行っていて習慣的にやっていることですが、言われてみると必ず右足から入れていることが分かりました。では、それを左足から入れてみることをやってみる、ということは、不自然です。ぎこちないです。けれども、それは習慣化させれば身に付くものです。このことを話しています。

そして、古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に付ける例として、いろいろなものをパウロは取り上げています。偽りを捨てなさい、その代わりに真実を語りなさい。盗みをやめなさい、その代わりに困っている人に施しをするために、ほねおって歩きなさい。すごいですね、罪を捨てるだけでなく、何かしてはいけないことをやめるだけでなく、積極的に愛と善行を行っていきます。そして興味深いのは、異邦人の歩みとして、怒ること、憤ること、悪いことばを語るることについてパウロは焦点を当てています。私たちはこの点について、箴言の学びで多く読んでいます。言葉の持つ力、言葉は人を陥れ、死にも至らせる危険なものであると同時に、人を建て上げ、人を生かすことのできる恵みと力も持っています。

そしてパウロは、「聖霊を悲しませてはならない。」という勧めを行ないます。「30-32 節 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」「赦さない心」は、異邦人の歩みです。受けた傷をそのまま抱いて、捨てないで恨むことは一切みな捨て去りなさいとパウロは命じています。そして身に付けることは、「赦しに基づいた優しさ」です。赦さないということは、本当に神を信じない、神を知らない者たちが行なうことであり、キリスト者とは相いれない性質なのです。

ここに、これらの悪意が聖霊の働きを妨げている、と言っていることに注目してください。何人かの兄弟姉妹に、私が一度、分かち合ったことがあります。ちょうど 5 月にカンファレンスにおいて、聖霊の働きを待ち望むアフターグローと呼ばれる集会についての、ちょっとした反省を言い表した時です。私がこう言いました。「聖霊が力強く働かないのは、臆病であるということと、人を赦さないことがある。」と言いました。臆病ということについては、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みの霊です。(2テモテ 1:7)」とあります。そして、人を赦さないことについては、ここエペソ 4 章に書いてあります。私たちが人を赦せず、そのことを心に抱き、怒りを持ち、そのために何かそこに負荷が与えられると強く反応する。こうした悪意をすべて捨て去って、神がキリストにあって赦してくださったように、赦しないと聖霊に満たされないのですね。

1A 愛のうちに歩みなさい 1-7

こうした流れがあって、初めて 5 章に入ります。

1B 捧げる愛 1-2

1 ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

5 章は、「愛のうちに歩みなさい」という勧めから始まります。神がキリストにおいて赦してくださったというところには、神の愛が示されています。私たちは神の愛について、いろいろ語りますが、犯してしまった罪を赦すというところには愛があるのです(1ヨハネ 4:10)。

そして、1 節に大きな命令があります。「神にならう者となりなさい。」です。神に倣うとは、神の真似をしなさい、という意味です。ちょうど子供が親の鏡という言葉があるように、真似をしなさい、とパウロは勧めています。「愛された子どもらしく」とありますね、愛されているという確信があるからこそ、神にならうことができます。罪の赦しについては、神の真似をしなさいという命令をイエス様が次のように行われました。「マタイ 5:44-45 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」これこそが最も大きな召しですね。神の子供として召されたのですから、神を父として、神に似た者になっているという召しです。

けれども、私たちはそれでも「そんなことはできない。」と思います。だからこそ、私たちは聖霊の力を求めなければいけません。イエス様は言われました。「使徒 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」聖霊の力によって、初めてイエス様の証し、すなわちイエス様のように生きることができます。1970 年代に、ヒッピーの間でイエス様を信じていくリバイバルがアメリカで起こりました。その時に、チャック・スミスは初めて、ヒッピーだけれどもイエス様を信じた若者に会った時に、「ちょうどたった今、イエス様に会ってきたかのような話をしていた。」と言っています。聖霊の力強い働きを受けると、たった今、イエス様と話してきたかのような現実味をもって、イエス様を証言することができるのです。

そして、神の愛について、さらに定義付けをパウロは行っています。それは、「捧げた」ということです。旧約のいけにえの制度の中に、牛や羊を祭壇に捧げて、火で焼き、その香りを神がかいで、そのいけにえを快く受け入れられるという教えがあります。キリストが父なる神に対して、そのようになられたということですが、愛というのはこのように犠牲であり、また分かち合い、捧げるというものであります。与えるところの愛です。そこで次を見てみましょう。

2B 不品行 3-7

5:3 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にする

ことさえいけません。5:4 また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。

愛のうちに歩むことを勧めた後で、不品行についてこのように避けなさいと教えているのは、なぜか？と言いますと、それは聖書が定義する「愛」と正反対の行為だからです。この世においては、このことも「愛」と定義します。しかし、聖書ではこれは愛の正反対の行為です。「むさぼり」という言葉がここにありますが、不品行や汚れは、究極に自分が受けるための愛だからです。自分が受けるだけでなく、奪い取る愛であり、神がキリストにあって示された愛とは相いれないのです。

そして私たちキリスト者の会話の中では、このような話題も避けなさいと命じています。そして、こうした下品な会話は避けて、身に付けることがあります。「感謝しなさい。」であります。悪を避けるだけでなく、善を身に付けます。感謝を捧げます。

5:5 あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者…これが偶像礼拝者です。…こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。5:6 むなしなことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。5:7 ですから、彼らの仲間になってはいけません。

パウロははっきりと、救われる人とそうでない人の区別を行なっています。不品行を行なう者、汚れた者、不品行な者、このような者たちは神の御国を相続することはない、すなわち救われずに、滅ぶのだと言っています。彼は念を押して、「だまされてはいけません」と言っています。パウロは4章から話しているように、こうした異邦人の歩みからキリストを信じる者は救われました。ですから、こうしたことを行いながら、天国に行けるとしたら自分を欺いていることなのです。悔い改めないといけません。そのことと、その肉の弱さに悩んでいることは違います。悩みの中では神が正しいことを認めているからです。悩みがあることは、救われている証拠です。悩みがなくなった時、それを正当化している時は非常に危険信号だと言えるでしょう。

2A 光の子供らしく歩みなさい 8-14

1B 実を結ぶ者 8-12

5:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主によって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。5:9 …光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。…5:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

「愛のうちに歩みなさい」に引き続き、「光の子どもらしく歩みなさい。」と勧めています。7節に、「彼らの仲間になってはいけません。」とパウロは戒めています。光と暗闇は、決して混じることはありません。光が来れば、暗闇は光になります。光がなくなれば、そこは暗闇になります。そこでパウロは言いました。「2コリント 6:14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。

正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。」不信者と信者は混じり合わないのです。

しかし、それは不信者と接触しないことを意味していません。光だけが暗闇に影響を与えます。暗闇が支配するのも、そうでないのも、光がその光を消すか、消さないかにかかっています。イエスご自身が、罪人や取税人たちと食事を取られました。共に親密な時間を過ごしました。しかし、影響を受けたのはイエス様ではなく、罪人や取税人たちでした。彼らが主の御言葉を聞くために集まり、そして主の御言葉を聞いて悔い改めました。その反対ではなかったのです。ですから、私たちの歩みは、光が暗闇を照らす働きであり、その光を隠してしまい、自分と不信者との関わりに暗闇が支配するようなことがないように、気をつけなければいけません。

ここで10節に、「主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」との勧めがあります。私たちの行動が常に、主を喜ばせているのかどうか、という高い基準であるべきです。しばしば、クリスチャンはこれをするのは正しいのか、正しくないのかという質問をします。その質問の背後の動機には、「なるべくこのことを行っていきたい。」という、ぎりぎりの線までそのことをやっていきたい、神に是認してほしいと思うことがあります。けれども、いかがでしょうか、誰かを喜ばせる時にそのような基準で動くでしょうか？旦那さんが、奥さんのために花束を用意する自由もあるし、そうではない自由もあります。そこには規則がありません。けれども、もし奥さんを喜ばせたいと思う時に持っていくことがあるでしょう。そこは正しいか正しくないかではなく、喜ばせたいという動機です。

同じように主に対して、このことを行なうのは主に喜ばれるのかどうか？という動機であるべきです。あることは別に行わなくてもよいものです。けれども、主の心に適ったことを、神に愛された者として喜んで行いたいと願うはずです。

5:11 実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。5:12 なぜなら、彼らがひそかに行っていることは、口にすることも恥ずかしいことだからです。

異邦人の歩みの中には、その異教の慣わしに忌まわしい性的不道徳が含まれており、旧約聖書の中にもそのことについて多くを書いています。そのような忌まわしさについて、仲間入りせずにむしろ明るみに出さないと言っています。キリスト者がそこにいるということは、自ずとその周りにおいて、暗闇の業が明らかにされていきます。

日本、いやいろいろな文化や社会では、タブーというものが存在します。そのような問題はあても存在しないかのように取り扱います。例えば自殺は、私たちは取り扱うことを避けようとしています。その背後にある恐ろしい暗闇を語ろうとしません。アルコール中毒の問題もそうでしょう、アル中の問題は深刻なはずなのですが、お酒に酔いしれることが許容されているなかで、対策がなんらとられていません。そして、パウロがここで取り扱っている性的不品行の問題は日本で蔓延していま

す。ポルノ産業は、世界に韓国に次いで二位となっています。人身売買についても、日本は世界的な機関の中で監視対象の国になっている、その対策が取られているとは言えない国として数えられています。

私たちは無理に、このような問題を取り上げる必要はありません。けれども、神が私たちを光として召されました。すでに、光になっているのです。ですから、必ず、自分の周りの人たちに、その人の持っている闇の部分が明らかにされていくのです。そのことを恐れてはいけません、ということです。キリスト教会をきれいにしてしまてはいけません。キリスト教会は、世における光であり、暗闇を光によって明らかにしていくところなのです。

2B 光に引き出される私たち 13-14

5:13 けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。5:14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」

この引用は、旧約聖書では見つからないのだそうです。恐らく、パウロの時代、初代教会で歌われていた賛歌ではなかったと言われています。つまり、夜がこれだけ暗くなっているのに、そのことに気づいていない私たちキリスト者に対して、目を覚ましなさいと命じている内容です。光によって全てのものが明らかになる時が近づいています。主が戻って来られます。そして、周りがどんどん暗くなっています。それでも何もしないで、「私は自分の信仰だけ守っていれば大丈夫。」とするのでしょうか？ということです。私たちは世の光であり、教会は神の国がサタンの国に攻め入っている、もっとも最前線にいる神の共同体です。

3A 賢い人のように歩みなさい 15-20

それでは最後の勧め、「賢い人のように歩みなさい」をざっと見てみましょう。

1B 機会を生かす 15-17

5:15 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、5:16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。5:17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。

これは、「時間を無駄に使ってはならない」ということです。悪い時代になったのだから、主に仕えるあらゆる機会を掴んで、熱心になりなさいということです。賢い者、愚かな者という対比を私たちは今、箴言で学んでいます。主の御心を知ることになり、それでそれをしっかりと、勤勉に行っていきます。

2B 感謝と賛美 18-20

5:18 また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

5:19 詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。

5:20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。

勤勉ではない、怠惰な生き方を象徴するのは、酒です。けれども、世の生活における疲れを癒したいと願い、お酒を飲むものです。しかし、キリスト者はそうであってはいけません。むしろ、御霊に満たされます。そして御霊に満たされる時に、しばしば賛美の歌をうたいます。主に対してほめうたを歌い、また主への感謝や賛美を互いに語っていく、このことに時間を費やしていく、これは大変有益なのだと言パウロは勧めています。